博物館雑誌　第36巻　第1号（通巻53号）1～28ページ 2010年12月

【論文】

イギリス博物館協会成立の背景

—19世紀末イギリスにおける博物館改善運動—

The Background History of the Formation of the Museums Association in Britain
:the Reconstruction Movement of Museums in the Late Nineteenth Century in Britain

大木　真徳※

Masanori OKI

Abstract

This paper examines the background history of the formation of the Museums Association in Britain.

In the latter of the nineteenth century, disorder of museums in Britain was outstanding compared to the Continent and the US. In the late century, the reconstruction movement of museums blossomed. The movement had some concrete aspects which can be regarded as principles of modern museum: (1) establishment of educational function, (2) multiplication of rate-supported museums, (3) rising significance of visitors to museum management, (4) professionalisation of curator.

And the movement resulted in the formation of the Museums Association in 1889. The formation was regarded as the most effective measure to improve museums. However, the association had an organizational defect from the beginning. It was the "strong natural history bias" in its membership. And it reflected the characteristics of the process of the formation.

This paper shows a possibility of museum associations as a research subject of museum history studies.

1. はじめに

2008年の博物館法改正をめぐる議論をひとつの契機として、今後の日本における博物館の発展を考えるうえで、日本博物館協会をはじめとする、博物館および学芸員の連携協力の促進を目的とした組織の果たす役割が改めて注目を集めている（cf. これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議 2007）。日本博物館協会は、海外の博物館協会の活動を参考にして、1928年に平山

※ University of Leicester, School of Museum Studies / 東京大学大学院教育学研究科

成信や棚橋源太郎らを中心に、当初、博物館事業促進会という名称で発足したものであるが、これに先立ち世界ではじめて博物館協会(Museums Association)が誕生したのはイギリスであり、1889年にその結成がなされている。イギリスでは、19世紀末に博物館改善の機運が高まり、そのひとつの帰結がこの博物館協会の結成であり、この時期はイギリスの博物館発達史を考える上でのひとつの画期といえる。当時は、博物館をより発達させるうえで、博物館およびその職員の連携促進がその最善策とみなされた一方で、誕生した博物館協会は設立当初から体制的な問題も包含しており、そうした問題は博物館協会の形成過程の特徴から生じたといえる。本稿では、イギリス博物館協会の成立過程に注目して、イギリスの博物館発達史におけるその意義を考察する。博物館史を捉え直す視点として、博物館協会をその分析対象に添えることにより、イギリス博物館の発達過程の一側面を照射することが本論文の試みである。

後述するように、19 世紀には地域の学術団体であったソサイアティ（society）による博物館の建設が急増する。これを受けて、そうしたソサイアティが発行する報告書には、博物館に関する論文が掲載されるようになる[1]。また、1831 年に設立されたイギリス科学振興協会（British Association for the Advancement of Science）の大会においても、たびたび博物館に関する問題が議論されており、いくつかのレポートも提出されている（e.g. British Association 1877; 1888)。こうした資料からは、当時のイギリス博物館が抱えた問題とそれを解決するための取り組みを読み取ることができる。加えて、1869年に創刊された科学雑誌ネイチャー（*Nature*）は、19世紀後半のイギリスの博物館史を検証するうえでの極めて重要な資料といえる。ネイチャー誌は、当時の博物館をめぐる議論が形成される主要な場であった。ネイチャー誌には、その創刊当初から、投稿欄が設けられており、博物館に関わる諸問題もそこで交わされる議題のひとつであった。本論文では、これらの資料に基づき、イギリスにおける博物館協会設立の背景を検証する。特に、ネイチャー誌からの引用が多くなるが、これは博物館協会結成の提言がネイチャー誌において初めてなされたことにも関連している。そして、後述するように、科学系雑誌であるネイチャーにおいて、その提言および意見交換がなされたことも、協会成立の背景を考えるうえで重要な示唆を与えてくれる。

なお、日本におけるイギリス博物館史に関する先行研究として、矢島國雄による一連の研究が挙げられる。特に、本論文が検討する19世後半におけるイギリスの博物館については、矢島(1992)が詳しい。そこでは、イギリスの博物館協会設立の経緯についても言及がなされているが、その背景にある当時のイギリス博物館が抱えていた諸課題や、そうした課題に対応して展開された博物館改善運動の諸側面を十分に描き出しているとはいえない[2]。本論文では、当時の博物館が抱えていた、そうした問題状況を明らかにし、その改善に向けた運動の諸側面を検討する。そして、その運動のひとつの帰結として、イギリス博物館協会を位置づけることにより、イギリス博物館発達史におけるその意義を改めて再考する。それと同時に、その博物館協会の組織のあり方自体にも当時の博物館をめぐる状況が強く反映されていたことを明らかにする。

2. 19世紀後半にみるイギリス博物館の後進性

(1) 諸外国と比較したイギリス博物館の後進性

イギリスの博物館史において、19世紀末は改革の時期と位置づけられる。イギリスにおいては、19世紀、特に、1820年代に入ると、博物館が急増することになるが、この発展は地域の学術団体として組織されたソサイアティ（society）によるところが大きく、この時期にはソサイアティがその学術的、社会的、および、教育的活動の一環として、精力的に博物館を建設するようになる。その一方で、そうした博物館は、運営母体であるソサイアティの財政的かつ人的な基盤の脆弱生から、当初から望ましい運営がなされていたとはいえなかった。19世紀の後半になると、博物館関係者からその窮状が公然と批判されるようになり、博物館の改善は急務の課題として認識されるようになる。

特に、ヨーロッパ大陸やアメリカにおける博物館の状況と比較した場合のイギリス博物館の後進性は顕著であり、ウィリアム・ドーキンス（William B. Dawkins）は、マンチェスター文学哲学協会（Manchester Literary and Philosophical Society）の1876年の年次集会において、以下のような発言をしている。なお、ドーキンスは、マンチェスター博物館のキュレーターを勤め、イギリス博物館協会の初期の活動においても中心的な役割を果たした人物である。

> 海外の博物館に関する私の経験からすれば、私は羨望と遺憾の念をもって、この国の博物館と向かい合わなければならない。この国においては、博物館はしばしば大規模な見世物市（advertising bazaar）といった類のものであったり、個人の家には不釣り合いな種々雑多の骨董品（miscellaneous curiosities）の収蔵庫であったりする。また、そうした博物館は、個々のそれ自体では価値のある資料であるが、あらゆる実用的な目的からみると、価値のない資料の集合によって構成されている。なぜなら、それらの資料は、スペースの不足から、一緒くたに詰め込まれていたり、もしくは、しまい込まれてしまっていたりする。大概の博物館は、人員不足であり、また、資金の不足に悩まされている。博物館は、主として気まぐれな善意に頼っている。そして、博物館は多くのソサイアティの乏しい資産にとって重荷になっている。ヨーロッパ大陸の諸国やアメリカ、オーストラリアでは、原則として、博物館の人員配備が進んでおり、整備も進んでいる。そして、運営資金をプライベートな資金に依存していない。こうした隣国や親類の国々との目を見張るような対比がなされてしまう我々の博物館の実情は、世界でもっとも裕福で、また時折私たち自身がそうであることを好むように、もっとも実用的な人々にとってのもっとも顕著な過ちである。（Dawkins 1876 p. 129）

こうした意見は当時の科学者たちにとっては共通の見解となりつつあった。特に、科学者によって、他のヨーロッパ諸国やアメリカなどの優れた博物館の事例が紹介されるようになったことにより、イギリス博物館が抱える問題が明らかにされたといえる。たとえば、1871年のネイチャー誌では、ドイツの自然史博物館は、教育施設としての有用性がイギリスの博物館よりも高く、

より明確な教育的な目的が付与されていると紹介がなされている（Anonymous 1871a; 1871b）。「手の施しようのない間違いや無能さを示すイングランドにある博物館の実例のほとんどは、他のヨーロッパ諸国のどことも並び比することはできない。」（Anonymous 1871c p. 35）と指摘されるほど、19 世紀の後半にはイギリスにおける博物館の後進性は明らかになっていた。

(2) 地方博物館の惨状

特に、地方博物館（provincial museums）の惨状は顕著であり、その運営上の問題は 19 世紀後半には頻繁に指摘されるようになる。すでに前述したように、地方博物館の多くは、各地域の有志により結成されたソサイアティが設立したものであり、その運営は設立当初から、人員面、資金面で安定性を欠くものであった。その望ましくない運営のあり方は、以下のような皮肉に富んだ指摘からうかがえる。

> それ（地方博物館の運営）は、あたかも、地方の天才たちが、その地域の自然史やその他の歴史に関する知識に関して最少の利益を挙げるために、いかに時間と資金を効果的に浪費できるかを証明するために知恵を働かせているようなものだ。（Anonymous 1871c pp. 35-36）（丸括弧内の注釈は引用者による。）

こうした非難は、地方博物館の統一性のない、非計画的な運営のあり方に向けられていた。

> 博物館は、その各々のパーツが適切に位置づけられ、有機的に結びつけられることによって、より高度に組織され、価値あるものとなる。一方で、各々のパーツに有機的なつながりと共通の生命が欠け、並列した単なるユニットの集合体のままに過ぎなければ、組織化が進んでいない、価値の乏しい博物館となる。不幸なことに、この国では、地方博物館の多くは後者に属する。（Dawkins 1877a p. 78）

地方博物館の運営における非計画性は顕著であり、そのために、地方資料の保存や自然科学の発展に資する施設としての役割やその可能性についても疑問が呈されていた。「この国の地方博物館を訪れたことのある科学者にとっては、そうした博物館が、国内のいたる所で形成されつつある、地質学および自然史のコレクションを保存する目的にどれほど役に立たないかは自明のことであろう。」（F. G. S. 1871 p. 367）、さらには、非計画的な地方博物館の運営によって、「自然史科学の研究は、進歩させられるよりも、むしろ妨害されており、また、広く普及した無知は維持され、強化されている。」（East Kent Natural History Society 1877 p. 7）といった指摘が、当時の地方博物館の研究および教育施設としての評価であった。

(3) 国立博物館の運営システムをめぐる議論

当時のイギリスにおける博物館で、運営上の問題を抱えていたのは、地方博物館に限らず、国立博物館（national museums）も同様であった。特に、国立博物館の運営システムをめぐっては、

19 世紀の後半に、頻繁に議論が提起されるようになる。そうした議論の多くでは、大英博物館（British Museum）の理事会（trustees）の構成が非難の対象として取り上げられていた。1753 年の大英博物館法(British Museum Act)では、その管理運営を、聖職者、官僚、さらに、大英博物館の設立に貢献した人物の一族から選出される世襲のメンバーなどから構成される理事会(the trustees of the British Museum）が担うことが定められた。そうした、理事の多くは、コレクション、特に、自然史系のコレクションに関する知識が十分でなく、その管理運営上、問題があるという指摘がこの時期には多くなされている。「理事会の恒久性やその不活発な実態に対して、繰り返してなされる批判はもっともなことである。理事の最大 9 人までは、無責任かつ免職不可能な世襲の理事であり、また、その他のメンバーの多くは、官僚や高僧によって占められている。… この事実は、理事会が不活性な組織であることを十分に物語っている」（Jevaon 1883 p. 74)。博物館に関心のある当時の科学者の多くからは、大英博物館の理事会は、博物館を科学的、合理的に運営するうえでの障害としてみなされていた。

さらに、1870 年代には、サウス・ケンジントン博物館（South Kensington Museum）の運営を、政府による直接の管理から、大英博物館の理事会の管理に委任する案が検討されはじめたことにより、国立博物館の運営のあり方に関する議論が一層過熱することとなった（Anonymous 1873a; 1873b)。

> 大英博物館の理事会が、彼らの博物館の科学分野に対して、無関心であることは、様々な委員会で繰り返し指摘され、非難されてきた。にもかかわらず、50 人からなる理事会の組織へは何の影響も与えていない。これが、彼らがサウス・ケンジントンに干渉してはならない唯一の理由である。… わずか数年でサウス・ケンジントン博物館が、この国が誇るまでの施設に発展できたのは、所管する大臣の個人的な能力やその精力的な執行運営のおかげである。そうしたことがサウス・ケンジントン博物館をこの国の主要な知的活動のセンターになしえたのであり、数十万という多くの人々の教育のためにその資源が活用されることになったのである。大英博物館の理事会はこうしたことを一切なしえていない。(Anonymous 1873b p. 2)

大英博物館をめぐる議論においては、特にその自然史系コレクションの管理運営に関する議論が活発であった。これは、この時期に、ロンドンのサウス・ケンジントンに新しい自然史博物館が建設されようとしていたことも反映している。大英博物館からの自然史系コレクションの移管とそれに伴う新しい施設の建築は 1860 年に決定がなされていたが、実際にその博物館が開館したのは 1881 年であった。それまで大英博物館では自然史系のコレクションが望ましい形で管理運営されているとは評価されてこなかった。これは博物館の組織としての欠点から生じた問題といえ、大英博物館設立の歴史的背景や資金、スタッフ、そして、理事会といった要素が関係していた。

自然史コレクションが他の建物に移管されることが決定したということは、科学者や大衆に

とって、その管理運営のあり方に革新的な変化をもたらす良い機会となるだろう。大英博物館は、もともとは公共図書館として設立されたことを記憶に留めておく必要があろう。そこでは、美術や科学に関するコレクションは、付属品にしかすぎなかったのである。… それゆえ、このシステムのもとでは、すべてが図書館の犠牲になってしまうことが容易に想像できよう。…大英博物館の動物学や植物学のコレクションの全体的な水準は、明らかに本来そうあるべき水準を大幅に下回っている。この種のコレクションを購入するために国立博物館にあてがわれる予算が極めて乏しいため、自然史関係のすばらしい標本のほとんどはアマチュアの手に渡っている。ディーラーは、新しい蝶やハチドリの標本を大英博物館に売り出そうとは思わないのである。…さらに、自然史系部門のスタッフは、人数の点で不十分である。彼らの給料は、他の部署の公務員と比べてとても低く、彼らに期待される職務からすれば極めて不十分なものである。従って、能力があり、教養のある若者がそうしたキャリアに就きたいと思わせる魅力がまったくない。こうした欠陥は、理事会がその特権を放棄していたならば、とっくに改善されていたであろう。しかし、大英博物館のすべての職員の任命に関して意見を提案する権利が 3 人の主要な理事に与えられることが法によって規定されており、それにより、当然、政府は理事会が職員の任命をコントロールできないようにすることができないでいる。(Anonymous 1876 p. 521)

現在の状況における重要な問題は、博物館の運営が首席司書 (principal librarian) によってなされている点である。彼は、本質的に、自然史よりもはるかに図書館に興味があるのである。彼にとっては動物や鳥の標本を処分することはためらいのないことであるが、例え一時的なものにせよ、図書を処分するとなると話は別になる。名目上は首席司書の雇主である理事会のなかには、自然史に興味のある人はほとんどいない。それゆえ、私たちが提案する計画に賛同したうえでの協力を理事に求めることはできない。(Anonymous 1880 p. 237)

1753 年の大英博物館法は、ハンス・スローン (Hans Sloane) のコレクションとコットン・ライブラリー (Cottonian Library) とを共同で管理運営することを定めた法であり、大英博物館は純粋に博物館として構想されたものではなく、むしろ、館長に当たる職が「首席司書(principal librarian)」と銘打たれたことからもわかるように、図書館としての性格がより強かったといえる。そうした図書館偏重の組織構成は、図書以外のコレクションを管理するうえで望ましいものとはみなされていなかった。特に、自然史系コレクションに関しては、その予算や職員についても、十分なものであったとはいえず、その改善が求められていたことがわかる。そして、その根本的な問題は、ここでもやはり管理運営の責任を担う理事の資質に求められている。こうした議論は、教育や科学を振興するという目的のうえで、国立博物館の運営に果たす政府の責任を改めて検討する議論にもつながり、例えば、教育および科学を担当する大臣を改めて任命する必要を喚起する意見なども提起されている (Anonymous 1874a)。

19 世紀のイギリスにおける博物館は、地方博物館、国立博物館に関わらず、組織的な問題を抱えており、そうした問題は、19 世紀後半になると、科学者や博物館関係者に自覚されるようになったといえる。19 世紀末までのイギリスにおける博物館は、「その起源は極めて偶発的なものであって、公共教育のための施設としての設立という点からすれば、その明確かつ知的なシステムを有せずにきたといってよいだろう」(Anonymous 1874b p. 397)。

3. 理想的な博物館運営の探求

(1) 組織的・合理的な博物館運営の喚起

19 世紀の後半に特に盛んとなった、そうした博物館の窮状を指摘する議論のなかで、その改善にむけた提言も同時になされるようになる。そこで根本的に求められたのは、博物館の組織的かつ合理的な運営であった。

当時、もっとも顕著な問題として、繰り返し批判されていたことは、資料が過度に密集されていることにより生じる、博物館の無秩序状態であった。過剰な資料による来館者の注意の散漫は、博物館の教育的・科学的価値を低下させる原因とされ、「博物館における２つの最大の害悪は、混雑 (crowding) と注意の散漫 (distraction) である」(Wallace 1869 p. 250) といった指摘がなされ、「過剰な資料による悪影響」(Jevons 1883 p. 60) は取り除かれるべきものとして、とりわけその改善が求められた。

組織的かつ合理的な運営とは、すなわち、資料の収集および展示における理にかなった資料の選択を意味した。「寄贈を断るという行為や、大衆向きの展示といったより有意義なスペースを設けることによって、地方博物館の最大の害悪は取り除くことができる」(Wallace 1869 p. 248)。

そして、シンプルでわかりやすい展示計画が、博物館の教育的な価値を上げるために求められた。イギリス博物館協会の初代会長を務めた、ヘンリー・ヒギンズ (Henry Higgins) は、博物館運営の原則として「節減の法則 (law of parsimony)」を提起している (Higgins 1884)。「節減の法則」とはもともと 14 世紀イギリスの哲学者オッカム (William of Ockham) らによって多用された法則であり、ある事象に関する説明は、必要以上に複雑であってはならず、より単純なものであるべきという理論を指す。ヒギンズはこの考え方が博物館の展示にも当てはまるとした。そのうえで、ヒギンズは、十分でない資金を、新たな資料を購入するために使うよりも、「より知的で教育的な展示を作成することに使った方が望ましく、また、そうした作業は資金を浪費することなくなしえる」(Higgins 1884 p. 190) とした。同様の観点から、ウィリアム・ジェボンス (William S. Jevons) は、展示の一貫性の必要を説いている。

> 教育を目的とする限りでは、効果の確固とした一貫性 (certain unity of effect) が不可欠であるということが、博物館の設立者や運営者に理解されていないようである。展示する標本が多数あったとしても、それらが全体として知的な印象を導くほどの関連性をもっていなくてはならない。(Jevons 1883 p. 56)

心理学的および教育的理由からして、長く続く展示室での多様なコレクションの展示はまったくの誤りであると、私はあえて指摘したい。そうした展示の最も悪い例は、サウス・ケンジントン博物館であり、残念なことに大英博物館の古い展示室にもそのような展示が見られる。すべてのコレクションは全体として調和されるべきであり、そうすることにより、確たる印象の統一感をもって、来館者がそうしたコレクションを見学し、研究し、記憶に留めることができるのである。(Jevons 1883 p. 61)

この時期には、このような資料を収集、展示するうえでの原則に関する議論と連動して、そうした活動を実際に担うキュレーターの実践的な技術に関する議論も徐々に論じられるようになり、ラベリングや剥製といった具体的な展示、保存技術に関する提起もなされるようになる (e. g. Flower 1876abc; Mial 1877)。さらに、ガイドブックやカタログといった、展示のための補助教材のもつ効果に対しても注目が集まるようになり、19 世紀末には、教育といった目的を意識した組織的、合理的な博物館運営が意図的に目指されるようになったといえよう。

(2) 地方博物館における地域コレクション形成の奨励

地方博物館に関連しては、その組織的・合理的な運営のあり方のひとつの見本として、地域コレクション (local collections) の形成が奨励されたこともこの時期の特徴といえる。19 世紀の後半には、博物館資料を、その性格から２つのグループに分類する考え方が広く普及したといえる。そのひとつは、科学に関する普遍的な知識を教授するための一般的なコレクション(general collections)であり、もう一方は、その地域固有の標本としての地域コレクション (local collections) である。こうした分類は、資料を教育的な目的で活用するという意図を反映したものであった。

地方博物館の改善方法は明らかである。地方博物館の無秩序とその改善の必要を明らかにしたうえで、その改善がいかになされるべきかが今の課題である。この目的のためには、まず何が望ましく、実現可能かを考える必要がある。地域の博物館(local museums)によって、一般的な自然史に関する原理とその地域固有の地域資料を、私たち自身、そして、若い世代に教育することが、明らかに実現可能であり、望ましいことである。(Anonymous 1871c p. 36)

さらに、こうした考えの背景には、地方博物館の無秩序を改善するうえで、地方博物館がそれぞれの地域に焦点を当てて活動をする意義が認識されるようになった経緯が指摘できる。それゆえ、地方博物館においては、地域コレクションの形成がより優先されるべきであるといった意見も提起され、そうすることにより、地方博物館の運営改善、教育施設としての価値の向上がはかられた。

地方博物館を設立する際は、その地域の植物、動物、および化石資料にまず注意を払うべきである。そのうえで、可能であれば、これに一般的なコレクションを加えればよい。すべてのコレクションは教育活動に関連づけられるべきである。協力の原則は支障なく適用されるべきであり、それぞれの博物館の貴重な資料の複製は、その交換と配布のために作成されるべきである。博物館は、一般大衆、地域のソサイアティ、教育団体、学校、カレッジなどが利用可能でなくてはならない。私たちが、そうした方向性で共通の認識と労力を費やしたならば、文化を普及させるうえで、我々の博物館がさらに重要な手段としてまもなく認められることになるであろう。(Dawkins 1877c p. 137-138)

博物館の資源が限られている場合は、地域コレクションの形成に関心を制限することで最大限の効果がおそらく達成されるであろう。…いまは、その地域の特性をもっともあらわしている資料が展示する価値がないとみなされ、実際にそうした資料が地方博物館でみることができないというのが現状である。…しかし、小規模の博物館がなにかしらの教育的価値を持とうとするならば、少なくともその発展の初期の段階では、その目的は制限されるべきである。多くの博物館は明らかにあまりにも多くのことを教えようとしすぎて、ほとんどなにも教えることができないでいる。(Rudler 1877 p. 140)

また、イギリス科学振興協会 (British Association for the Advancement of Science) によって設置された委員会は、1887 年と 1888 年に地方博物館に関するレポートを発表している。そこでは、地方博物館と地域との関係性に焦点が当てられている。

主として地方博物館は徹底的かつ完全にその地域の所産を活動の基盤とするべきというのが、大多数の有識者の意見である。そして、こうした見解は、多くの先進的な博物館のキュレーターによって奨励されている。(British Association 1877 p. 123)

ここに地方博物館が果たさなければならない仕事がある。そして、そうすることにより、地方博物館の正当性や最も有益な活動領域を見出すべきである。すべての地方博物館は、第一に、*その地域に関する完全な説明をなすモノグラフ*になるべきである。(British Association 1888 p. 126) (引用文中の斜体字はママ。)

その地域の可能な限りの情報を収集することは地域博物館 (local museum) に課された特別な仕事である。そして、そうして集められた情報は、貴重で痛み易い資料が破損してしまう危険を避けたうえで、大衆のまえにできるだけ明瞭なかたちで展示されるべきである。(British Association 1888 p. 128)

19 世紀末には、このような地域コレクションを、計画的に収集し、保存することが、地方博物館の根本的な義務とみなされるようになったといってよいだろう。そうすることが、地方博物館の望ましい運営のあり方とされたのである。

> 地域コレクションの形成と保存は、一時の衝動や個人の偶然な熱意に頼るべきでない。それは、一般的に認められる能率的なシステム（business-like system）の産物であるべきだ。地域の地質学者や収集家によって形成されてきたコレクションを、その地域の博物館のために保存するというは、地域ソサイアティの義務であるべきである。そして、そうしたコレクションが散逸するか、もしくは、大英博物館に移管されることを許すべきでない。大英博物館では、そうしたコレクションの多くは埋もれてしまうといってよいだろう。すでにそこには管理できないほどの地質学のコレクションが保管されている。(F. G. S. 1871 p. 367)

(3) 国立博物館の運営の合理化にむけた提言

地方博物館と同時に、国立博物館の運営に関しても、その改善策が提起されるようになる。大英博物館の理事会の問題は既述したが、これに関連して、ジェボンスは、国立博物館は「中立的で混成された、科学者および実業家の委員会によって、つまり、カレッジと同様の方法で運営されるべきである。そうした理事会や委員会は、財政や、博物館の構造、および、キュレーターの専門的かつ科学的活動の保障に関する議題を扱うことになる」(Jevons 1883 pp. 72-73) と提言している。彼によれば、このシステムには２つの利点があり、具体的には、キュレーターの公平な任命がなされることと、キュレーターの自由が保障されることであるとした。こうした指摘には、この時期におけるキュレーターの専門職化の萌芽が確認できる。

さらに、当時の大英博物館の理事会の問題は、そのメンバーの要件だけでなく、社会における博物館の役割や目的といった議論とも結びついており、そうした議論では、博物館の科学・研究的目的と教育的目的との関連とバランスが論点となっていた。

> こうした公共の施設が公務員によって管理されるべきか、それとも理事会といった組織で管理されるべきかといった問題については、多くの議論があるところである。しかし、その決断は、その博物館によってなされている崇高な活動の成果を全く無視した偏見によってなされるべきではない。…私は、国立博物館の科学的な価値や活動を、展示室をぶらつく来館者の人数で判断しようとする考えには断固抗議する。大衆教育や大衆の余暇善用における博物館の有用性は疑いのないものだが、そうした大衆のための活動は、文化や自然の産物として厳密に収集された科学的資料とは全く異なるものである。…私は、大英博物館の理事会、および、それぞれの学問分野を発展させるために雇用された、すぐれた科学者や文化人であるスタッフによってなされている崇高な活動が正当に評価されることを期待したい。…そして、もし科学者が大英博物館を十分に利用することができないようであるならば、それはその科学者自身の責任であり、理事会の責任ではない。(Jevons 1873 pp. 26-27)

このような、国立博物館の科学や研究の振興に果たす役割を強調する議論がある一方で、以下のように、より大衆のための教育に価値を置くべきとする意見もあった。

私は、大英博物館は国立博物館であり、大衆のための博物館であると見なしてきた。それゆえ、資料の展示やラベリングは最も簡潔で教育的性質を持ったものであるべきである。そうした資料は、最も高次な科学的関心に対立することなく、むしろ、そうした関心に完全に一致する。…大英博物館の理事会は、博物館の科学的かつ教育的な機能の十分な発達に関心を払うために時間を割くべきである。…科学もしくは科学者が、この博物館から得られる利益を独占すべきであるといった見解は、驚くほど利己的で了見の狭いものである。もし理事会がそうした考えを持っているようなら、大衆のために大英博物館は閉館したほうが良いだろう。(S.P.G. 1873 p.103)

こうした指摘からは、国立博物館の望ましい運営のあり方に関する議論が、社会において国立博物館が果たすべき役割に関する議論をも包含する内容であったことがわかる。具体的には、科学・研究に果たす役割と大衆教育に果たす役割との関係とそのバランスが論点になっていたが、博物館運営におけるこの両者の位置付けに焦点を絞った当時の議論として「新しい博物館構想(the new museum idea)」がある。

(4) 「新しい博物館構想」の提起

19世紀末に提起された、組織的・合理的な博物館運営のあり方の典型的な具体化のひとつとして、ウィリアム・フラワー (William H. Flower) [3]によって提唱された「新しい博物館構想(the new museum idea)」(Flower 1893 p.29) が挙げられる。フラワーは、博物館の効率性は、主要な２つの活動目的を明確に分離することによって、上昇させることが可能であるとし、その２つの活動目的とは、科学・研究の促進と大衆教育であるとした。フラワー自身も認めているように、このような博物館像の萌芽は、1864年のイギリス科学振興協会の第34回大会におけるジョン・グレイ (John E. Gray) の講演にみることができる。グレイは、博物館の２つの類型を指摘し、「第一の類型は、大衆に教育と理性的な娯楽を提供することを目的としたものであり、第二の類型は、その博物館が保管する資料を調査し研究する可能な限りの手段を、科学研究者に提供するものである」(Gray 1864 p.76) とした。そのうえで、グレイは当時の博物館の状況を以下のように評価している。

本質的に異なる、この２つの目的を同時に果たそうとするなかで、第一の目的、つまりは、一般大衆のための教育がかなり軽視され、第二の目的に対応した利点を伴うことなく、その犠牲になっているのが現状のように見える。これは、博物館のシステム自体が完全に誤ったものであるからである。…この２つの目的をひとつの一貫した展示のなかで結合させようと

する無駄な試みのなかで、現在の博物館はそのどちらも達成することができないでいる。(Gray 1864 p. 76)

「新しい博物館構想」は、このような非効率性を改善するために、博物館に課せられたこの２つの目的を明確に区分することを提起したものである。

このような考え方は、すべての博物館の展示の根本的な原則となるべきである。つまり、コレクションを役立てるための目的を、明瞭に２つに分けるべきである。ひとつは、物置や倉庫になることなく、一般の来館者が理解でき、そこから利益を得られるような公共的な展示のためのコレクションで、もうひとつは、観察や研究のために便宜がはかられるように整列されたコレクションである。(Flower 1889 p. 18)

フラワーによれば、これらの２つの機能に置かれる比重は、国立博物館か地方博物館かによっても異なるとした。フラワーは、「この２つの機能を同等に果たすことを期待できるのは国立博物館だけである」(Flower 1893 p. 30) としたうえで、地方博物館については、大衆教育により重点を置くべきであるとしている。つまり、「一般の来館者、つまりは、専門家になるわけではないが、多くの教養ある人が習得したいと思う知識を得たいと思う人々を対象とした博物館の教育的、娯楽的目的をより発展させることは地方博物館のキュレーターの義務となるであろう。」(Flower 1893 p. 33) と指摘している。

博物館の機能や目的を区別することによって、その運営の改善を図る構想はこの時期には散見されるものであり、例えば、動物学者アルバート・グンサー(Albert C. L. Günther)は、1880 年のイギリス科学振興協会の第 50 回大会における講演のなかで、科学・研究の振興を、初歩的段階と専門的段階のさらに２つの水準で区分し、以下に示すような博物館の活動目的の 3 類型を提起している。

博物館の活動目的には 3 つの領域がある。それは、(1) 大衆に対する知識普及および余暇善用の促進、(2) 生物学に関する初歩的研究の支援、(3) 生物学の専門的な研究者に、彼らの研究に資する、収集可能なすべての資料を提供し、次世代の研究者の研究基盤となるようにその資料を保存すること、である。(Günther 1880 p. 592)

19 世紀後半に見られるようになる、「新しい博物館構想」に象徴される博物館運営の組織化、合理化の試みは、イギリスにおける博物館改善運動の進展の兆しとして捉えられる。

19 世紀後半は、イギリスの博物館にとってまさに転換期であったといえる。先に取り上げた 1864 年のグレイの講演のなかでは、以下のような時代認識が示されている。

自然史博物館に大変革が起きる時が近づいて来ている。それゆえ、私はこのような提言を投げかけるのである。これによって、博物館の有用性は飛躍的に拡大するからである。(Gray 1864 p. 78)

4. 19 世紀末イギリスにおける博物館改善運動：近代博物館の諸側面の成立

以上のような、理想的な博物館運営に関する議論が深まりを見せるなかで、より具体的な博物館改善のための提言や取り組みが 19 世紀の末には隆盛する。その博物館改善運動には、いくつかの特徴的な側面を見出すことが可能であり、そのいずれもが近代博物館の根本的な要件と見なされる性格を持つものであった。具体的には、博物館の教育機能の確立、公立博物館の増加、来館者への意識の高まり、そして、キュレーターの専門職化といった特徴が指摘できる。

(1) 博物館の教育機能の確立

これまでに引用してきた文献の随所にも認められるように、19 世紀後半の博物館をめぐる議論においては、その教育機能が主要な論点とされた。この時期には、博物館の教育的目的が、その存在意義を正当化する最も有効な根拠とみなされるようになったといえる。特に、自然科学系の博物館は科学教育の推進という目的と強く関連していた。「19 世紀末のイングランドでは、科学教育は研究室よりもむしろ博物館により強く関連づけられていた。…博物館は、ビクトリア時代における学習環境の中核であったのである」(Arnold 2006 pp. 175-76)。

この時期には、博物館の有用性がその教育的価値によって測られるようになったといえる。これには、当時の教育政策の進展も影響しており、具体的には、1870 年の初等教育法 (Elementary Education Act) の施行により、イングランドおよびウェールズにおける初等教育制度が確立したことがあげられる。これを機に、学校教育における博物館利用を促進する機運が高まった。より具体的には、19 世紀後半における初等教育制度の確立は、科学者にとって「彼らの持っている科学的知識を、もっとも簡潔で容易な方法で、自然科学に関する学習を促進させるために利用する絶好の機会である」とされ、その方法として「学校博物館(School Museums)」が提起されている (Page 1882 p. 386)。学校と博物館との関係については、以下のような指摘もなされている。

博物館が時に、教師が動物学や地質学、その他の自然科学の授業をおこなう教室として利用されることは望ましいことである。そこでは、その授業のためにきちんと整理された資料が利用できる。(E. H. 1877 p. 276)

また、学校教育における博物館資料を活用した授業を推進するうえで、その目的に特化した新しいコレクションを形成する必要を説く意見などもあり (e. g. Gladstone 1884)、この時期には、学校における博物館および博物館資料の利用に関する具体的な提言が多くなされている。それと同時に、ヨーロッパ大陸の諸国と比べて、イギリスでは、「学生が必要としている、資料を利用した授業システム (system of object-lessons) のための器具に関しては、嘆かわしいほどに不足

している」といった指摘もなされている（Carpenter 1884 p. 220）。

博物館の教育施設としての有用性の主張は、同時に博物館における教育や学習の特性に関する議論をも喚起するものであった。先に引用した「資料を利用した授業（object-lessons）」といった用語は、そうした議論の一例といえる。デビット・マーレー（David Murray）によれば、資料を用いたそのような教授法の目的は、観察能力（faculty of observation）の育成にあるとされ、そうした能力は「現在の教育制度では、もっとも訓練がなされていない能力である」とされた（Murray 1904 p. 259）。それゆえ、マーレーは、「博物館は必要な学術教育手段として認知されるべきであり、博物館は大学、技術学校において重要な役割を果たし、初等教育および中等教育を支援する機関となるべきである」（Murray 1904 p. 260）と主張している。このような議論が進展するなかで、博物館に、当時の学校教育を補完し、さらには、改革する役割が期待されるようにもなった。

> 博物館は、視覚や触覚によって得られる物体の知識および真の教育を象徴するものである。学校において支配的であった、これまでの感覚の伴わない言葉による教育をやめるべき時が到来しつつある。（Jevons 1883 p. 64）

博物館における教育の特徴としての視覚や触覚を利用した教育方法の意義がこの時期に認められるようになった。さらに、そうした教育施設としての特徴を認識したうえで、カレッジや他の教育機関との連携を促す意見も出されている。

> 原則として講義による教育が聴覚を使うように、博物館は視覚を媒介として教育をおこなう。そして、口述による教育（oral education）の経験を有する人は、教育博物館を支援する適正があるといってよいだろう。（Rudler 1877 p. 140）

また、1881 年には、資料の収集や展示の作成を含めた、博物館の設立活動自体を学習の過程とみなす観点に立った、ヘンリー・ホースマン（Henry Housman）による博物館設立の手引書が発刊されており、同書の目的は、「博物館を作ることによって、少年たちがどれほど多くの楽しみと情報を得ることができるかを示すため」であるとしている（Housman 1881 p. vii）。

こうした議論を通じて、「博物館教育」の概念が形成されるなかで、博物館教育における学習者の主体性の意味も問われてくるようになる。

> 博物館は自己教育（self-instruction）の最も容易な方法である。大衆を啓蒙し、無気力で平凡な環境から引き上げる最も確かな手段である。（Murray 1904 p. 269）

しかし、こうした学習者の主体性の重要性は、博物館における教育活動の成果が、来館者の能力

や意欲によって左右されることをも意味し、以下のような指摘もなされている。

> しかし、それ（読書により得られる利益があらかじめ予測できるということ）は公共博物館とは異なるものである。なぜなら、個人が来館することによって得られる利益は、皆無から極めて大きなものに至るまで多様であるからである。博物館の教育活動で得られる成果は統計的に測ることは困難である。得られる成果の度合いに差があるだけでなく、どのような利益が得られるかにも大きな差がある。(Jevons 1883 p. 55)（丸括弧内の注釈は引用者による。）

こうした博物館教育の理解は、必然的に学習者としての来館者への注目の高まりにも結びついており、この時期における来館者への関心の高まりについては改めて後述する。

博物館における教育や学習の特性がかなり具体的に論じられるようになったのは、この時期の博物館をめぐる議論の大きな特徴といってよいだろう。

(2) 公立博物館の増加

次に、19 世紀末の博物館改善運動の具体的な動向として、地方自治体が運営に関与する公立博物館の増加が指摘できる。より正確にいうならば、運営資金として地方税が投入される博物館(rate-supported museums)が増加したのである。これには、博物館教育に対する注目の高まりとも関連して、博物館の設置運営が国および地方自治体の公共的な義務として認識されるようになったことが反映されている。このような意識は、「個人的には、知的な特徴を持った恒久的な公共の施設を設立すること以上に崇高な目的なほとんどないように思われる」(A. R. 1877 p. 286)といった指摘に象徴的に示されている。

19 世紀後半には、それまで地方のソサイアティのプライベートな資金によって運営されていた多くの博物館が、地方税がその運営資金に当てられる、いわゆる公立博物館に移行されることになった。19 世紀前半、特に 1820 年代に、地方における地質学の流行を受けて、地域のソサイアティによって設立された博物館は、イギリスにおける博物館のひとつの起源ともいえる（cf. Knell 2000)。しかし、そうした博物館の多くは設立後まもなく財政難によって運営が行き詰まることとなった。

> いまの地方自治体立博物館や地方税によって支援される博物館の多くは、もともとは地域のソサイアティによって設立されたものであった。いまだにそうしたソサイアティから重要な支援を受けている博物館もあるが、会員による寄付が減少することによって、こうした博物館運営のあり方が成り立たなくなる場合が生じて来ている。博物館を管理する責任はもはやないと思っているソサイアティには、博物館に対する関心を失っている団体もある。いまや地域のソサイアティから何らかの支援を受けている公立博物館（rate-supported museums）は、わずか 10 館程度である。(British Association 1887 pp. 126-127)

1880年代には、博物館の運営資金を会費や有志による寄付に頼ることは、博物館を運営するうえでの適切な手段とはすでに見なされなくなっていた。

> 博物館に対する寄付は昔話である。そうした時代はもう終わった。これまで博物館を支援してきた組織やグループも今後はそうすることはないだろう。また、博物館を歓迎するであろう、より大多数の大衆には博物館に寄付をする余裕がないのである。(Greenwood 1888 p. 107)

地方自治体制度の発展や博物館に関する法制度の整備もこうした動向に影響を与えていた。19世紀の後半には、イギリスにおいて博物館に関係する法体系が整備された（cf. Chambers and Fovargue 1899)。初めての博物館法（Museum Act）が1845年に成立しており、その後、いく度かの破棄と修正を繰り返し、地方自治体による博物館運営に関する様々な規定が定められることとなった。1845年の博物館法においては、地方議会（local councils）が、税率を制限したうえで、博物館の運営経費に支出することを目的とした地方税を徴収することが可能とされた。しかし、この法律によって地方自治体立博物館が急速に発展することはなく、法制定後の5年間で博物館を設立させたのはわずか6自治体であった（Lewis 1992 p. 27)。その後、1855年に公共図書館・博物館法（Public Libraries and Museums Act）が施行され、その税率の上限が引き上げられたことも受け、19 世紀後半にはそうした地方税による財政支援を受ける博物館（rate-supported museum）が急増し、1880年代には、博物館を地方税で運営するのが、もっとも合理的で望ましい博物館運営のあり方と見なされるようになった。「博物館のなかで、真に有益な活動をおこなっているのは、地方税によって運営される博物館（rate-supported Museums）のみである。会費や自発的な寄付によって運営されている博物館は老朽し、衰退した状態に陥っている」(Greenwood 1888 p. viii)。

この地方税による博物館運営の制度は、地域のソサイアティによって運営されていた地方博物館の財政難を解決する手段であったのと同時に、地方自治体の制度としての永続性が博物館を運営する主体として望ましいという観点からもその意義が評価された[(4)]。

> 地方自治体の重要な基本的原則のひとつは、組織としての永続性が与えられるということである。…事実、地方自治体は、絶え間ない部分的な変化を経ながらも、そのアイデンティティを保持する川の流れになぞらえてきた。…これが、博物館、公共図書館、教育に関して地方自治体によってなせることが、企業ではなすことが不可能である理由であり、こうした考えに基づいて、市民の財産であり、市民の代表によって管理運営される地方自治体立博物館、公共図書館、大学が必要とされる。こうした施設が市民の地域生活に欠かせないものなのである。(Greenwood 1888 p. 19)

こうした地方税の博物館運営経費への導入を受けて、博物館に対する公的資金の支出を正当化

することを目的に、博物館の持つ公共的な価値が意識的に議論されるようになった。先に述べた、博物館の教育的目的の強調は、そうした動向の具体的な一側面とみなせる。さらに、博物館およびそのコレクションは、公共財産として認識されるようにもなり、「博物館は公共の福祉のためのものであるのだから、諸外国にならって、博物館を効率的に運営するために必要とされる資金は、公的な資金で賄われることが最も妥当であり、公平である」(Dawkins 1877c p. 137) といった指摘からそうした認識の変化が確認できる。

教育的目的に加えて、19 世紀においては、社会改良 (social reform) といった博物館の活動目的も、博物館の設立運営が公共的な義務であり、サービスであるという認識の形成に影響を与えたといえる。「ヘンリー・コール (Henry Cole) [5]の新しい博物館の構想は、当初から、明らかな教訓主義 (didacticism) に基づいていた。さらに、1860 年代以降は、実践的かつ“道徳的”教育に対する関心の観点から、ヘンリー・コールの構想は国際的に認められ模倣されるようになった」(Arnold 2006 p. 175)。こうした動向は、「シチズンシップ (citizenship)」の概念とも結びついていた。「大衆に市民としての義務や権利の意識 (sense of the duties and privileges of citizenship) を涵養させることは喫緊の課題である」(Greenwood 1888 pp. 19-20) という認識のもと、具体的には、博物館は労働者階級の余暇善用促進の手段とされた。「自然史に関する研究活動は、それ自体が高等教育の一形態であると同時に、あたかも上流階級が頭も手も使わずに働いているかのように、時折誤って労働者階級と呼ばれている、下層階級の文化 (the culture of the lower) にもうまく適応できるものである」(Dawkins 1877b p. 98)。

こうした労働者階級の余暇善用や生活改善に関わる博物館の意義は、当時の労働者階級自身にも認められていたようであり、1877 年のネイチャー誌には以下のような投稿記事が掲載されている。

> すべての自然史の愛好家が収集家になることができないことを考えれば、博物館は計り知れない意義を持っている。収集家になれなくとも、視覚を有する限り、能力があれば資料を観察することは可能なのである。もし研究のための広範囲な野外調査ができない場合でも、博物館が身近にあれば、少なくともそこでその証拠を検証することができるであろう。…この個人的見解が、いわゆる労働者階級といわれる人々が研究活動をおこなううえで障害となる困難を説明するのに役立つであろう。(Watts 1877 p. 162)

このような文脈のなかで、キリスト教の安息日との関連から、博物館の日曜開館の是非が、博物館に関する主要な議題のひとつとなっていたのも当時の博物館をめぐる議論の特徴となっている (Greenwood 1888 pp. 196-219)。

以上のように、その財源や活動目的といった側面から、博物館の「公共性」に関する議論が深化したのが 19 世紀末といってよいだろう。特に、博物館の設置運営に公的資金が当てられるようになったことは、納税者という観点から博物館と市民との関係を改めて捉え直す契機にもなり、

「急速な知識の普及は、納税者である大衆に、少なくとも税金のある程度は、若年層の教育のために支出されるべきであるということを、まもなく理解させることになるであろう」(East Kent Natural History Society 1877 p.8) といった指摘もなされるようになった。こうした、博物館利用者、来館者に対する意識の高まりがこの時期の博物館改善運動に見られる3点目の特徴として指摘できる。

(3) 博物館運営における来館者の持つ意義の向上

博物館運営における来館者の持つ意義の高まりは、19世紀末の博物館改善運動に見られるひとつの特徴といえる。すでに述べて来たように、この時期において、来館者は博物館にとって様々な意味を持つ存在となる。つまり、来館者は、博物館にとって、教育および啓蒙の対象であるのと同時に、納税者という観点からすれば資金源であり、所有者でもあった。

そうした来館者への意識の高まりは、来館者の特性を把握する試みがこの時期になされるようになったことからもわかる。例えば、リヴァプール博物館 (Liverpool Museum) のヒギンズ (H. Higgins) は、来館者を以下に示すように3つのカテゴリーに分類している。

> 博物館への来館者は便宜上、研究者 (Students)、観察者 (Observers)、徘徊者 (Loungers) の3種類に分類することが可能である。
>
> Ⅰ. 自然科学に関する知識を深めたいという明確な目的を持って来館する人は研究者に分類される。
>
> Ⅱ. 博物館を見たいということ以外、明らかな目的を持たないが、少なくとも展示に集中できる来館者は、観察者とみなされる。
>
> Ⅲ. 徘徊者については、その特徴を述べる必要もないが、彼らが来館者の一部を形成している。ただ、子どもについては、それ自体で検証され、働きかけがなされる価値があるが、観察者ではなく、このグループに分類されるべきである。(Higgins 1884 p.186)

この分類に基づいてヒギンズは、具体的に、リヴァプール博物館の来館者を、「1000人の来館者の内訳は、研究者が10人から20人、観察者が780人、子どもを含めた徘徊者が200人、である」(Higgins 1884 p.186) と見積もっている。このような来館者把握をしたうえでの、ヒギンズの主張は、博物館はより多数である観察者や徘徊者に注意を向けるべきというものであった。ヒギンズは、そうした明確な目的や科学的な知識を伴わない来館者に対する博物館の働きかけを、「間接的作用 (indirect influence)」とし、当時の博物館において特に検討されることが必要な事項としている。

> 私は、無料の講義や公開の読書室について話しているのではない。なぜなら、その利用者は、すでに自己教育 (self-education) への道のりにあるからである。我々が関心を持ちつつあるのは、間接的な手段 (indirect agencies) であり、その作用をいかに最大限に引き出せる

かということである。(Higgins 1884 p. 184)

科学に関する教養がある人にとっては、博物館による教育活動は直接的なものといってよいだろう。我々がいま特に関心を寄せているのは、一般大衆である来館者に対する間接的な作用（indirect influence）である。公共博物館とコミュニティとの親密な関係を構築する方法は多様である。(Higgins 1884 p. 187)

このように科学に対する関心の薄い一般の来館者にどのように働きかけるかがこの時期には博物館運営上のひとつの課題となったといえる。当時の博物館の退屈さ（dullness）を非難したジョン・ウッド（John G. Wood）は、その現状を「専門家に対する強い関心の一方で、博物館が一般大衆にとって耐えられないほど退屈なものであるというのは、個人的な経験からわかる、紛れもない事実である」(Wood 1887 p. 384) と評している。そして、「博物館運営において一般大衆の要望があまりにも無視され過ぎてきたのではないか」(Wood 1887 p. 385) という問題意識にたって、ウッドは博物館を以下に示すような3種類に分類している。

ひとつは純粋に科学的な目的のために発展されるべき博物館であり、そうした博物館は部外者の妨害から安全であるべきである。ここでいう部外者は、一般の人々（*profanum vulgus*）として認識されるべきであって、そのように扱われるべきである。そして、2つ目の種類として、科学の基本を学ぼうとする人たちであり、いずれ研究者へと成長することになる人たちを対象とした博物館がある。そして、最後に、他の2つのタイプと同様に重要なものとして、一般大衆を対象とした博物館があるべきである。そうした博物館は、一般大衆を知らず知らずのうちに教育するのである。(Wood 1887 p. 386)

ウッドは、イギリスではこの3つ目の種類の博物館がほとんど見受けられないとし、一般大衆のための博物館は、彼らにとって「すぐれて魅力的なものでなくてはならない」(Wood 1887 p. 392) と喚起している。

このように19世紀末には、博物館運営における来館者の持つ意義が意識的に問われるようになったといえる。特に、研究者や専門家ではない、一般大衆がその活動の重要な対象として取り上げられることとなった。

(4) キュレーターの専門職化

以上の3点に加えて、19世紀末イギリスにおける博物館改善活動の特徴として、キュレーター（Curator）の専門職化の進展も指摘することができる。19世紀末には博物館の改善にキュレーターの果たす役割が認められるようになり、「実際は、博物館の成功や有用性は、その建物やケース、さらには、資料でもなく、キュレーターにかかっている。彼とそのスタッフは博物館の生命であり、魂でもあり、そこに博物館の価値がかかっている。しかしながら、私が思うに、ほとん

どの博物館ではそうしたことは優先事項になっていない」(Flower 1889 p. 11)といった指摘がなされている。また、この時期のキュレーターに関する議論では、その要件や専門職としての社会での認知の必要も喚起されている。

> 多くのキュレーターが賛同してくれると思うが、私が指摘したいのは、キュレーターが社会から正当に評価されていないということ、また、その重要性や課題が決して十分に理解されていないということである。…技術、手先の器用さ、良識、いずれもが重要である。加えて、キュレーターが、成功をおさめるためには、他の専門職には必要とされない、道徳的な資質も求められる。時間厳守、職業気質 (habits of business)、協調性、とりわけ、キュレーターの日常の大半を占める、些細でいくぶん単調な日常業務を遂行するうえでの不屈で根気強い取り組みが必要である。こうしたものがキュレーターとしての要件であるとすれば、キュレーターを生計の手段として選ぼうとする人に何らかの誘因がなくてはならない。…私が指摘したような、教育や人材育成、人類の進化の手段としての博物館の利点は、高学歴の人々からキュレーターが名誉ある、また、魅力的な専門職として認められることによってのみ、効果的に達成できるということが重要である。(Flower 1893 pp. 27-28)

博物館運営に果たすキュレーターの役割や、キュレーターの専門職としての社会における評価の向上が喚起されるなかで、専門職としてのキュレーターの特性も議論されており、例えば、研究者のような専門家とは異なるその資質に関して以下のような指摘がなされている。

> たとえすぐれた科学者であったとしても、専門家 (specialist) は博物館のキュレーターにはむいていない。キュレーターは、一般的な知識や教養を持った、新聞の編集者のような存在であるべきだ。編集者と異なり、キュレーターはどの政党にも所属すべきではないが、科学や芸術に対する普遍的な共感を有していなくてはならない。そして、調和のとれた全体的な計画にそれぞれの分野を従属させるような方法で、専門家の助言を受け入れ、利用をする心構えがなくてはならない。さらに、キュレーターは博物館の日常業務に関する経験的な知識を有していなくてはならない。そうした知識は、すぐれた博物館での訓練や実習によってのみ習得することができる。(J. P. 1877 p. 183)

このように専門職としての望ましいキュレーター像が指摘されるのと同時に、ラベリングや標本作成などの、キュレーターに求められる具体的な技術に関してもこの時期に発展が見られた (e. g. Flower 1876 abc)。特に、剥製技術に関しては、その重要性が指摘されるようになり、剥製技術者の正当な評価の必要も喚起された (Miall 1877)。

以上のような、キュレーターの専門職化の進展に伴い、キュレーター同士の連携・協力の必要を認識されるようになり、イギリスの 19 世紀末の博物館改善運動のひとつの帰結として、1889

年にイギリス博物館協会が結成されることとなる。

5. イギリス博物館協会の成立と特徴

(1) イギリス博物館協会の成立過程[6]

19 世紀後半には、キュレーターによる相互協力は、博物館改善のもっとも効率的な方法として指摘されるようになり、それを促進する大会の開催および協会の結成が博物館関係者からは望まれるようになる。特に、ネイチャー誌において、その提案が繰り返しなされている。その発端となったのは、シェフィールド博物館（Sheffield Museum）のキュレーターであったイライジャ・ホワース（Elijah Howarth）の 1877 年のネイチャー誌における以下のような指摘であった。

> 博物館を運営する人々に、博物館をより発展させるための相互協力の必要を提案するのに望ましい時期がきているだろう。ここ数年での、この国の多くの地方自治体における博物館設立のめざましい進展は、その運動を促進してきた人々の功績である。そして、博物館が教育や大衆の知的な発達に与える影響は、それが適切に活用され、発展させられるのならば、国家および個人による支援に対する強力な主張を与えることになる。(E. H. 1877 p. 276)

19 世紀後半には、こうした連携協力の必要性とその意義は、博物館関係者から強く意識されるようになったといえる。ホワースの指摘の翌年には、博物館協会設立の主唱者の一人であるグラスゴー（Glasgow）のケルヴィングローブ博物館（Kelvingrove Museum）のジェームス・ペイトン（James Paton）が、「相互協力によって、より一層有益性を増すことのできる施設は博物館のほかにはない」（J. P. 1877 p. 183）と指摘し、その意義を強く主張している。

そうした意見のなかには、連携協力の推進により、博物館関係者が共有すべき共通の規則が形成されていくことを期待するものもあった。

> 博物館運営者による大会の構想は、恒久的な組合（permanent union）の結成へと帰結するものであろう。もし博物館職員にお互いの意見を交換し、それぞれ異なる実践的な経験を共有できる機会が提供されることになるならば、これは素晴らしいアイデアであると思う。そうすることにより、いくつかの取り決めや規則がおそらく一般的に承諾されることになろう。そうした規則には、例えば、標本のラベリング、複製品の交換や、年刊報告の発行などがある。(Meyer 1877 p. 227)

また、ホワース（Howarth, E.）はそうした協会を結成する利点を、「博物館の多様性や成功を収める運営のあり方に関連した実践的な質問を考慮すれば、意見や経験談の交換によって得られる利益は極めて大きい。それに加え、博物館の統一された行動によって大いに促進される物事で、地方博物館に影響を及ぼすことは数多くある。そのひとつとして、大英博物館の複製品の分配が

あるといえる。」(Howarth 1880 p.492) と説明している。このような博物館協会の利点を具体的に指摘する意見と同時に、例えば、情報交換を目的とした月刊もしくは季刊の機関誌の刊行が提案されるなど、協会が取り組むべき事業についても具体的な言及がなされるようになり (Holmes 1880)、1880 年代には、博物館協会の利点や活動内容が具体的に提案されるまでの状況になっていた[7]。

こうした協会への期待の高まりは、博物館協会に先立って 1877 年に結成された、イギリス図書館協会 (Libraries Association) の成功も影響を与えていた。「イギリス図書館協会の成功は、博物館職員による同様の協会の結成が同じような良い結果をもたらすことを確信させる根拠を示している」(Howarth 1880 p.492) と指摘したホワースは、1884 年のダブリンで開催されたイギリス図書館協会の年次大会において、同協会へ加盟可能な対象を博物館にまで広げるよう提案をおこなった。当初、好意的に受け入れたこの提案も、結果としては図書館協会の理事会において拒否されることとなる。こうして、博物館で形成される独自の協会結成へ向けての動きが本格化することとなる。

1888 年には、ヨークシャー哲学協会 (Yorkshire Philosophical Society) の理事会がイングランドの主要な博物館に呼びかけるかたちで、博物館協会結成にむけた事前の協議会がヨーク (York) にて開催される運びとなった。この会議において正式に博物館協会の結成が決議されると、ヨークシャー哲学協会は改めてイングランド内のすべての博物館に対し配布文を送り、翌 1889 年に同じくヨークにて博物館協会の結成大会が開催されることとなった。

こうして、19 世紀末のイギリスにおける博物館改善運動は、1889 年のイギリス博物館協会の結成というひとつの帰結をみることになる。

(2) 初期のイギリス博物館協会にみるメンバーシップの偏り

これまでみてきたように、イギリスにおける博物館コミュニティの自主的な改善運動の一環として、博物館協会の設立がなされたわけであるが、協会には設立当初から体制的な不備があった。それは、協会を構成するメンバーシップの偏りである。これについては、イギリス博物館協会の百年史をまとめた、ジェフリー・ルイス (Geoffrey D. Lewis) が「強力な自然史関係者のバイアス (strong natural history bias)」(Lewis 1989 p.11) と指摘している[8]。実際に、協会設立の事前協議会や設立大会の参加者の多くは、地質学や動物学、植物学といった自然科学系の素地をもった博物館関係者であった。また初期の年次大会を見ても、参加者による発表の多くは自然史関係の内容が占めている[9]。

こうしたメンバーシップの偏りの原因は、協会の形成過程に求めることが可能である。それを象徴的に示すように、博物館協会を設立するうえで、その議論がネイチャー誌を媒体としておこなわれることを期待した以下のような指摘がある。

> (博物館関係者の大会の開催に、) 興味関心のあるすべての人々によって、真摯に、かつ、精力的に、この議論が交わされることを望む。そして、ネイチャー誌という媒体を通して、こ

れに関する提案をおこないたいと希望する人たちのために便宜が図られることを望むのに加え、個人的に私に対して意見を申し出てくれる方とも喜んで対応したい。(Paton 1880a p. 442)（丸括弧内の注釈は引用者による。）

このように、ネイチャー誌というメディアを媒体としながら、博物館協会に関する議論が自然科学者の既成のネットワークのなかで形成されてきた経緯が、必然的に協会設立時のメンバーシップに偏りを生じさせたといってよいだろう[10]。この点については、イギリス博物館協会に限らず、1906 年設立のアメリカ博物館協会の設立過程においても指摘できる特徴であり、ヒュー・ジェノウェイ（Hugh H. Genoways）とメアリー・アンドレイ（Mary A. Andrei）は以下のように分析している。

この不均衡（自然科学系への偏り）は、自然史博物館の職員たちがはじめて専門職として組織され、1889 年にイギリス博物館協会を、1906 年にアメリカ博物館協会を結成したという事実を表象している。これは、美術館や歴史博物館の職員が専門職化するのが遅かったというわけではない。むしろ、単純に、この時期には他のタイプの博物館に比べて自然史博物館の館数がより多かったのである。そして、自然史博物館に職を得た、科学者たちは、博物館に関する自分たちの意見をより広範な人々に普及されるうえで極めて有利な出版事業という慣習を持っていたのである。(Genoways and Andrei 2008 p. 10)（丸括弧内の注釈は引用者による。）

そして、イギリスに関しては、「1920 年代までは、イギリスにおける博物館の多くは自然科学によって占められており、この国の自然史に対する理解を発展させるうえで博物館が重要な役割を果たしてきた」(Knell 1996 p. 29) のが歴史的事実である。19 世紀以降の地域ソサイアティの発展に応じて形成された自然科学者のネットワーク[11]が、博物館を改善するうえで果たした役割は大きく、イギリス博物館協会初期にみる自然科学の優位性はそうした経緯に起因しているといってよい。つまり、博物館協会の設立は、そうした自然科学系の科学者を中心とした博物館関係者による自主的な改善運動の帰結であったがゆえに、その構成には色濃くその形成過程の特徴、さらにいえば当時の博物館をめぐる環境が反映されていたと指摘できる。

6. おわりに

本論文においては、イギリスにおける博物館協会の成立に注目して、その歴史的背景の分析を試みた。イギリス博物館の発達史において、19 世紀はそのひとつの画期であったといえる。矢島が「英国の 19 世紀の歴史を振り返って見ると、その後、今日に至るまで議論されている事がらの多くが、既に課題として提唱されている様子を知ることができる」(矢島　1992 p. 32) と指摘しているように、19 世紀には、博物館における展示論、運営論、教育論といった各論の萌芽が確認

できる。しかし、こうした博物館論の展開は、19 世紀のイギリスにおける博物館の発達を示す一方で、そうした議論の高まり自体が 19 世紀末に顕在化したイギリス博物館の後進性や課題に対する改善運動の一環をなしていたといってよいだろう。イギリス博物館協会の設立に関しても、矢島は「こうした 19 世紀の博物館の発達を、基礎として、博物館専門職員の必要性が叫ばれるようになり、また、英国博物館協会が結成されることになるのが、19 世紀も末のことである」(矢島 1992 p. 26) としている。これについても、博物館協会の設立がイギリスにおける博物館の発達を基礎としていることは確かであるが、本論文では、むしろ当時の博物館の後進性や課題がその直接的な動機であり、協会の設立をその改善運動の具体的なひとつの帰結として捉えることにより、イギリス博物館史におけるその位置付けをより明確することを試みた。また、それと同時に組織としてのイギリス博物館協会自体に注目することにより、その組織のあり方にも当時の博物館をめぐる状況が如実に反映されていたことを明らかにした。つまり、初期のイギリス博物館協会のメンバーシップの偏りは、当時の博物館改善運動は自然科学系の博物館関係者が主体となって担われていたことを示している。こうした、博物館協会のあり方自体に注目した研究は日本ではこれまでなされてこなかったといえる。

このように博物館協会の成立過程やその組織構成に着目することにより、博物館の発達史を捉えるうえでの新な視点を提示できるといってよいだろう。また、しばしば博物館の政治的利用を促進する運動体としての成立背景を指摘される日本博物館協会 (e. g. 金子 2001 pp. 31-36) と比較すると、本論文で検証してきたイギリス博物館協会の設立過程は極めてその様相を異にしており、博物館史研究における国際的な比較研究の視点としても、博物館協会は高い可能性を有しているといえる。

博物館およびその職員の協力連携を促進する組織の必要性は、日英を問わず、古くから指摘され続けて来た。一方で、そうした組織の歴史的な展開についてはこれまで意識的に分析がなされてきたとはいえず、こうした取り組みが博物館発達史を新たに捉え直す試みとして持つ意義は少なくないであろう。博物館史を考える上での重要な分析対象としてのこうした博物館協会の価値は極めて高いものといえる。

註

(1) 例えば、イギリス博物館協会の初代会長を務めたヘンリー・ヒギンズ (Henry Higgins) は、1884 年のリヴァプール文学哲学協会 (Literary and Philosophical Society of Liverpool) の年報において、博物館運営に関する論文を発表している (Higgins 1884)。

(2) 矢島 (1992) においても、本論文で引用しているウィリアム・ドーキンスの指摘 (Dawkins 1876) に言及して、当時のイギリスにおける地方博物館の問題状況が指摘されているが、本論文で検討するように、当時のイギリス博物館の後進性や課題に関する指摘は、ドーキンスの指摘に限らず、頻繁になされており、その内容も、国立博物館の運営のあり方にまで及ぶなど、多岐に渡っており、その把握は十分とはいえない。

(3) フラワー（Flower, W. H.）は、ロンドンの自然史博物館（Natural History Museum）の館長を務めた人物で、イギリス博物館協会の第3代の会長も務めている。

(4) 一方で、この時期にはすでに、地方博物館の地方税による運営制度の問題点も指摘されており、例えば、博物館と図書館の両施設を運営する自治体においては、図書館に対する支出が博物館よりも大きくなってしまい、十分な予算を博物館が得られないといった事態が生じる場合があった。バーミンガム（Birmingham）においては、「地域のコミュニティに、博物館および図書館を設立することを目的に、課税をすることが法的に認めとめられているが、バーミンガムではその税金のすべてが公共図書館に投入されており、産業博物館を設立する手立てがないのが現状である」(Anonymous 1877 p.228)とその問題点が指摘されている。こうした議論からは、地方行政のなかでの博物館の運営の位置付けが議論の対象になってきたことが伺える。

(5) ヘンリー・コール（Henry Cole）は、サウス・ケンジントン博物館（South Kensington Museum）設立の主唱者であった。

(6) イギリス博物館協会の成立過程については、Platnauer & Howarth 1890 および Lewis 1989 を参照のこと。

(7) このような提案は多くの博物館関係者の支持を得る一方で、反対意見も少なからず提起された。1880年のネイチャー誌に掲載された、匿名の記事では、「大会の増加は、面倒なことではないか。あらゆる階級やそれぞれの人の特徴に対応した特別な大会が、神経質な愚か者によって提案されることになるであろう。」と指摘したうえで、「必要なものは大会ではなく、キュレーターに対する適切な給与である。彼らは、教養のある、有能な人物であるべきであり、そうした人物が適正な給与で雇用されれば、博物館は彼らの手によって今とはまったく異なるものに生まれ変わるだろう。」(Academicus 1880 p.492) と、博物館の協会設立よりも、キュレーターの身分保障のほうが重要であると指摘している。しかしこうした意見はあくまで少数意見であり、この投稿に対しても、ネイチャー誌においてすぐに非難がなされている (Paton 1880b; Allen 1880)。

(8) この他にも、ルイスは、事前協議会および設立大会への呼びかけがイングランドの博物館に限られたことなども協会の設立過程の特徴として指摘している。(Lewis 1989 p.7)

(9) 具体的には、1890年の第一回年次大会では、会長であったヘンリー・ヒギンズの講演に続いて、次に示すような発表がなされている。①W. ボイド・ドーキンス「博物館の組織と展示について」(W. Boys Dawkins "On Museum Organisation & Arrangement")、②F. W. ルドラー「博物館における自然史資料の命名の援助に関する提案」(F. W. Rudler "Suggestions for Aid in the Naming of Natural History Specimens in Museums")、③H. C. ソービー「無脊椎動物の乾燥標本の作成について」(H. C. Sorby "On the Preparation of Specimens of Invertebrata Dried on Glass")、④ジョン・チャード「学校およびその他の教育的目的のための巡回博物館キャビネットについて」(John Chard "On Circulating Museum Cabinet for Schools and Other Educational Purposes")、

⑤トーマス・ジョン・ムーア「リヴァプール無料公共博物館に関する覚え書き」(Thomas John Moore "Notes in the Liverpool Free Public Museum")、⑥R. キャメロン「博物館を大衆にとって魅力的なものにするための最善の方法」(R. Cameron "The Best Means of Making Museums Attractive to the Public")、⑦トーマス J. ムーア「地域の地質模型の必要」(Thomas J. Moore "A Plea for Local Geological Models")、⑧E. ホワース「博物館ケースと博物館来館者」(E. Howarth "Museum Cases and Museum Vistors")、⑨リチャード・ペイデン「博物館における冬期夜間講座」(Richard Paden "Winter Evening Lectures in Museums") (Platnauer & Howarth 1890)。②③⑦についてはタイトルから自然科学関係の内容であることが明らかであるのに加え、その他の発表についてもすべて自然科学系の博物館の実践を前提とした内容になっている。例えば、④において紹介されている巡回キャビネットは、地質標本、動物標本、植物標本といった自然科学系の資料で構成されているし、⑨において紹介されている講座の具体的な内容も自然科学関係の講座となっている。歴史博物館や美術館に関する発表がひとつも見出せない点は、イギリス博物館協会の初期の特徴を如実に表しているといってよいだろう。

(10) また、博物館協会の設立に関わらず、当時の博物館に関わる主要な議論がこのネイチャー誌のなかで交わされていたことはすでにみてきた通りである。

(11) そうしたネットワークの構築に関しては、Knell 2000 を参照。

引用参考文献

Academicus 1880 "A Musuem Conference", *Nature*, 21, p.492.

Allen, J. R. 1880 "A Museum Conference", *Nature*, 21, p.515.

Anonymous 1871a "The utilisation of natural history museums for scientific instruction in Germany", *Nature*, 3, p.441.

Anonymous 1871b "The utilisation of natural history museums for scientific instruction in Germany Ⅱ", *Nature*, 3, pp.462-463.

Anonymous 1871c "On the Objects and Management of Provincial Museums", *Nature*, 5, pp.35-36.

Anonymous 1873a "Our National Museums", *Nature* , 8, pp.543-544.

Anonymous 1873b "The Government and our National Museums", *Nature*, 9, pp.1-2.

Anonymous 1874a "A Minister of Science" *Nature*, 9, p.278.

Anonymous 1874b "The Science Commission's Museum Report", *Nature*, 9, pp.397-398.

Anonymous 1876 "Our Natural History Collections", *Nature*, 14, p.521.

Anonymous 1877 "Local Museums", *Nature*, 16, p.228.

Anonymous 1880 "The New Museum of Natural History", *Nature*, 22, p.237.

A.R. (1877) "Local Museums", *Nature*, 16, p.286.

Arnold, K. 2006 *Cabinets for the Curious: Looking Back at Early English Museums*, Aldershot; Ashgate.

British Association 1887 "a report upon the provincial museums of the United Kingdom", in

Report of Fifty-seventh Meeting of the British Association, 1888, pp.97-131.

British Association 1888 "a further report upon the provincial museums of the United Kingdom", in *Report of Fifty-eighth Meetings of the British Association*, 1889, pp.124-132.

Carpenter, W. L. 1884 "Primary Education at the Health Exhibition", *Nature*, 30, pp.218-220.

Chambers, G. F. and Fovargue, H. W. 1899 *The Law Relating to Public Libraries & Museums and Literary and Scientific Institutions*, London; Knight and Co.

Dawkins, W. B. 1876 Address of the Manchester Literary and Philosophical Society (引用が *Nature*, 15, 1876, p.129 に掲載)

Dawkins, W. B. 1877a "The Need of Museum Reform", *Nature*, 16, pp.78-79.

Dawkins, W. B. 1877b "The Value of Natural History Museums", *Nature*, 16, p.98.

Dawkins, W. B. 1877c "The Organisation of Natural History Museums", *Nature*, 16, pp.137-138

Easr Kent Natural History Society 1877 *Nineteenth Report of the East Kent Natural History Society.*

E.H. 1877 "Museums", *Nature*, 15, p.276.

F. G. S. 1871 "The Museums of the Country", *Nature*, 4, p.367.

Flower, W. H. 1876a "Museum Specimens for Teaching Purpose", *Nature*, 15, pp.144-146.

Flower, W. H. 1876b "Museum Specimens for Teaching Purpose Ⅱ", *Nature*, 15, pp.184-186.

Flower, W. H. 1876c "Museum Specimens for Teaching Purpose Ⅲ", *Nature*, 15, pp.204-206.

Flower, W. H. 1889 Address at the fifty-ninth meeting of the British Association, in *Report of the Fifty-ninth Meeting of the British Association*, 1890, pp.3-24.

Flower, W. H. 1893 "Modern Museums", in Platnauer, H. M. (ed), *Report of Proceedings with Papers Read at the Fourth Annual General Meeting*, York and Sheffield; Museums Association, pp.21-48.

Genoways H.H. and Andrei M.A. (eds) 2008 *Museum Origins*, Walnut Creek; Left Coast Press.

Gladstone, J. H. 1884 "School Museums", *Nature*, 30, p.384.

Gray, J. E. 1864 Address on "Botany and Zoological, including Physiology" section, in *Report of the Thirty-fourth meeting of the British Association*, 1865. pp.75-86.

Greenwood, T. 1888 *Museums and Art Galleries*, London; Simpkin, Marchall and Co.

Gunther, A. C. L. G. 1880 "Opening address" of Section D in the fiftieth Annual Meeting of the British Association at Swansea, in *Report of the fifteenth meeting of the British Association,* 1880, pp.591-598.

Higgins, H. H. 1884 "Museums of Natural History," *Proceedings of the Literary and Philosophical Society of Liverpool*, 38, pp.183-221.

Holmes, E. M. 1880 "Museum Conference", *Nature*, 22, p.10.

Housman, H. 1881 *The Story of Our Museum: Showing How We Formed It, and What It Taught Us*, London; Society for Promoting Christian Knowledge.

Howarth, E. 1880 "A Musuem Conference", *Nature*, 21, p.492.

Jevons, W. S. 1873 "The Management of the British Museum", *Nature*, 9, pp.26-27.

Jevons, W. S. 1883 *Methods of Social Reform and Other Papers*, London; Macmillan and Co.

J.P. 1877 "Museum Reform", *Nature*, 16, p.183.

Knell, S. 1996 "The Roller-Coaster of Museum Geology" in Pearce, S. (ed.) *Exploring Science in Museums*, London; Athlone.

Knell, S. J. 2000 *The culture of English geology, 1815-1851 : a science revealed through its collecting*, London; Ashgate.

Lewis, G. 1989 *For Instruction and Recreation: A centenary history of the Museums Association*, Lonson; Quiller Press.

Lewis, G. D. 1992 "Museums in Britain: a historical survey" in Thompson, J. M. A. (ed.) *Manual of Curatorship: A Guide to Museum Practice*, second edition, London; Museums Association.

Meyer, A. B. 1877 "Museum Reform", *Nature*, 16, p.227.

Miall, L. C. 1877 "Museums", *Nature*, 16, p.360.

Murray, D. 1904 *Museums Their History and Their Use*, Vol.1, Glasgow; James and MacLehose and Sons.

Page, A. S. 1882 "School Museums", *Nature*, 26, p.386.

Paton, J. 1880a "A Museum Conference", *Nature*, 21, p.442.

Paton, J. 1880b "A Museum Conference", *Nature*, 21, pp.514-515.

Platnauer, H. M. & Howarth, E. (eds.) 1890 *Report of Proceedings with the Papers Read at the First Annual General Meetings*, Museum Association.

Rudler, F. W. 1877 "Museum Reform", *Nature*, 16, p.140.

S.G.P. 1873 "The British Museum", *Nature*, 9, p.103.

Wallace, A. R. 1869 "Museums for the People", *Macmillan's Magazine*, 19, pp.244-250.

Watts, W. 1877 "Natural History Museums", *Nature*, 16, pp.161-162.

Wood, J. G. 1887 "The Dulness of Museums", *The Nineteenth Century*, 21, pp.384-396.

これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議 2007 「新しい時代の博物館制度の在り方について」

金子淳 2001『博物館の政治学』青弓社

矢島國雄 1992「英国博物館史：その２」*Museums Study*, 3, pp.25-33.